

平成 30 年 6 月 28 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26350037

研究課題名(和文) 地域コミュニティを基盤にした子育てにおけるピア・サポートプログラムの開発

研究課題名(英文) The study on a peer-support for child-rearing in community

研究代表者

吉川 はる奈 (YOSHIKAWA, Haruna)

埼玉大学・教育学部・教授

研究者番号：70272739

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)： 地域の子育て支援ニーズを明らかにすること、特に子育て当事者のための支援の在り方について、国内、海外の先駆事例を分析しながら、示していくことを目的に研究を行った。その結果、支援ニーズは地域の特徴や支援施設の特徴によって異なっていた。たとえば、地域の立地だけでなく、どんな施設と併設するかによって異なっていた。

海外での支援事例では、フィンランドのネウボラやドイツでのファミリーセンターをとりあげたが、長期継続性、多様性、柔軟さ、居心地と安心感などを特徴として示していた。また子育て当事者のピアによるサポートの重要性も指摘された。

研究成果の概要(英文)： Interviews were carried out for childcare nurse of child-rearing support centers in the main cities in Japan. Interview to child-care nurses are as follows; 1) consultation of mother and father, 2)reason for coming to the childcare center, 3)how to join in the other mother's group, 4)why they come to the child-care center, 5)what to do for mother and children making use of the center We featured two common needs for centers. (1) Parents come to child-care center to feel easy about child-care. (2) Parents intend to become friend with others and get information about child-rearing. On the other hand, they come to child-care centers because of individual reasons. Someone wants to consult about troubles of children development and health. Someone comes to have the joy of playing with their children and other. Child-care nurse should support for family in accordance with individual reason. It seems effective to use regional network, a peer-support system.

研究分野：生活科学

キーワード：子育て 地域 ピアサポート 子育て支援

### 1. 研究開始当初の背景

日本では、出生数の減少や1980年代からの「育児不安」の増加に対応し、1994年に少子化対策としてエンゼルプランを策定して以来、少子化対策をすすめてきた(新エンゼルプラン(1999)、子ども・子育て応援プラン(2004)、子ども・子育てビジョン(2010))。しかし依然として、改善はみられず、育児不安や子育て中の孤立感を抱く親が多い。また昨今の地域における教育力の低下も、国内で大きく指摘される場所である。核家族化や、家族のライフスタイルの変化によりさらに孤立した子育てが児童虐待の温床になっているという指摘もある。

子どものための施設とは、OECDの方針同様、教育とケア分けない融合したものであり、子どもを全体としてとらえ、子どもの可能性を開かせ、育ちを保障するところ、つまり子どもと大人が出会い、意味を共有する場であることが求められ、子どもと家族を支える地域場が求められている。

一方で、子どもの育ちの脆弱さへの対応についても課題とされている。核家族で育ち、生活経験が少なく、自分の行為についての感覚、身体感覚が乏しい子どもの増加で、対人関係の弱さ、コミュニケーション能力の低さ、自尊感情の低さが問題として指摘され危惧されている。子どもの生涯発達に重大な影響を及ぼしかねないとして、子どもと家族を支える場が早急に求められているという実態がある。

### 2. 研究の目的

上記の背景をふまえ、子育て当事者の支援ニーズを明らかにすることで、子どもと家族を地域社会で支える支援の在り方について検討することをめざしていく。

具体的には、地域コミュニティを基盤にした子どもと家族をサポートする先駆事例として国内、海外の子育て支援事例をとりあげ、その実態調査、支援にかかわる支援者や子育て当事者にインタビュー調査を行い、共通性とともにもそれぞれがもつ個別性を呈する因子や概念を抽出していく。地域の子育てにかかわる施設として、子育て支援施設、保育施設、小・中学校、放課後施設少年の家でもインタビュー調査を行い、地域の子育て支援の在り方の示唆をえることを目的に研究を行った。

### 3. 研究の方法

インタビュー調査と視察実地調査。その他、各施設で収集した資料による分析を合わせて行った。

### 4. 研究成果

- 1) 子育て当事者へのインタビュー調査：投稿中である。基本的な属性をたずねたのうち、子育ての中で楽しいと感じるとき、

子どもをかわいいと感じるとき、子どもの成長を感じる時、子育て中に大変だと感じる時、など、子育て当事者を対象にインタビューを行った。

子育ての中で楽しいと感じる時期について、当事者は、子どもの成長を感じる時という回答が最も多かった。子どもの健やかな成長は母親に大きな安心感を与えるとともに、自分の子育ては間違っていないという自分の行為への自信につながるのだと推測された。また、詳細にみていくと、子どもと関わる中で、子どもの笑顔を見る、子どもを通じて生活が充実したとき、に子育てを楽しんでいる傾向にあった。さらに、その他のきょうだいの様子、関係によっても変わることが示されていた。

きょうだいと一緒に遊んでいる姿や、年上の子どもが下の子どもの世話をするなど、良好なきょうだい関係を通して子育ての楽しさを感じる傾向があった。また、子どもをかわいいと感じるときは、子どもが甘えてくるときで、自分が必要とされている感じをもつことができ、とてもかわいいと感じると回答していた。子どもの成長を感じる時に、子育てを楽しんでいると回答していたが、子どもの成長を感じる時は、どのようなときかを尋ねたところ、言語が発達したと感じるとき、ということだった。言語が増えるということは、明確に変化をキャッチできるという。またコミュニケーションをとれることが実感でき、とてもうれしいということだった。子どもの姿に具体的に成長をとらえ、さらにその成長を実感できるということが重要だと推測された。

- 2) 国内の子育て支援者へのききとり調査(印刷中)日本国内で子育て支援にかかわる子育て支援者に、ききとり調査を行った。最近の子育てを取り巻く環境、子育て支援センターの利用者の様子、利用のしかた、利用者が子育て支援センターを利用するきっかけ、母親の仲間形成過程、子育て支援センターで遊んでいる子どもの様子、相談されるときの内容の特徴、支援者として接するとき心がけていることなどである。

国内の異なる7自治体にある子育て支援センター10か所の支援者を対象に、聞き取り調査と視察調査を行った。倫理的配慮について説明し、同意を受けたうえで行なった。ききとり回数は1施設1回、時間は1時間程度であった。

支援者へのききとり調査で共通して強調されたのは、子育て支援施設の場の雰囲気を利用者にとって大変重要で、支援者として大事にしているということだった。理由としては、その場を必要と

している人に何度も足を運んでもらいたい、足を運んでもらうことで、子育ての不安や悩み、その深刻化による虐待等を防ぐためだということだ。自分の居場所があることによる安心感をもってもらいたいという。利用者どうしの様子をみて、利用者どうしをつなげる配慮など細かな対応も共通していた。施設の立地の特徴によつての違いもうかがわれた。たとえば、ターミナル駅に近い施設では、核家族の利用者が多く、かつ多国籍であり、一方、観光途中で困って立ち寄る利用者もいるという。また、保健センターに併設しているところなどは、保健センターで相談しようかとまよっている相談を話しやすい支援センターの支援者にもちこんだりするということがあった。また祖父母との同居が多い地域では、世代間の子育て観の違いや子どもの生活イメージの違いで葛藤を感じるという回答もあり、コミュニケーションの取り方の難しさもうかがわれた。施設の立地や、構造によつても、利用のきっかけや支援者の役割も異なってくることがうかがわれた。

### 3) 海外での先駆事例からみられる特徴

先駆事例として、フィンランドの子育て支援事例（埼玉大学紀要に掲載（ ）ずみ）ならびにドイツのファミリーセンターを取り上げ検討した。

フィンランドで展開されている子育て支援の特徴については、妊娠期から切れ目のない継続した支援として、ネウボラ（相談の場）を中心とした地域のしくみが特徴的である。国内の子育て支援政策の変遷の中で、日本の支援は量として増加しており、充実してきた。しかし、子育てと仕事の両立のための支援とともに、家庭で育児をしている親子たちにむけた支援も求められ、子育てする人すべてを対象にした、地域での支援の重要性が指摘されているところである。

できるだけ早期から人間関係をつくり、長期継続して頼れる人がいること、その場を居場所にしていくことで子育ての大きな安心感につながるという。フィンランドでは、妊娠が判明し、子育てパッケージを受け取るころから、支援者との人間関係ができ、ネウボラが母親と家族の居場所となり、子どもの成長、家族の成長に立ち会っていくという。ネウボラナースが継続して対応しており、長期にわたり支援の関係が継続する安心感は大きい。日本国内ではこれまで実施されてきた、母子保健相談のしくみがあり、妊娠が判明した後、母親は母子健康手帳を受けとり、助産院、産婦人科病院での母親学級に参加する、など出産にむけた準備をすすめる。妊娠中の健診は病院、産

院で行うが、その出産後の子どもの健診、相談は多くは地域の保健センターであり、対応する専門家は異なってくる。

カルテに経過が記載され、医療者は情報を共有しているが、同じ担当者が継続して診察するというわけではないので、同じ医療者にみてもらう安心感があるとはならない。

子育て支援におけるニーズは地域によつてもまた家族によつても異なる。それぞれにあわせて対応することを目指している。また世代による考え方の変化、時代の変化による違いも子育て当事者に影響を与えていた。

ドイツのファミリーセンターでは多国籍の利用者にあわせたニーズを模索していた。母語を忘れずに、ドイツ語を学ぶという姿勢でことばの教室等も開かれている。ことばを学ぶことで、地域で生活しやすくする、ことばだけでなく、ダンス、ヨガ、料理、バレエなどさまざまなグループ・サークルが活動していた。

近くの幼稚園では、多くの国旗が園内の廊下に貼られ園児の国籍を示しているとのことだった。ドイツの国籍をもつ子どもの方が少ない状態であるという。園児にとっては違和感なくそれが日常であり、当たり前である、お祭り際には、さまざまな国の料理の店が出される。

### 4) 子育てにおけるピア・サポートを援用したプログラム

すべての親子にとって質の高い子育て支援の仕組みを模索する際に、先駆事例からは、継続した支援の重要性と多様な対象を受け入れる柔軟な体制、安心感をもてるピアと居心地よい雰囲気を実感できることが示された。同時に、人によるつながりは重要であるとともに、当事者の自主的な活動、主体的な行為が重要になっている。ピアによるサポートがより取り入れられていくことが求められる。

ピアによるサポートは、仲間によるサポートであり、当事者同士のサポートである。支援の主体になり、活動に参加し、関与していく。その主体的関与によつて自分の居場所をみつけていくことがみられた。

### 5) 今後の課題

ピア・サポートの視点を取り入れた、子育て支援の実践事例分析をさらに増やし、深めていくことである。

### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 4 件)

吉川はる奈、妊娠期から切れ目のない支援

を模索する日本の子育て支援の現在 日本家政学会誌 68 (12) 704 - 709 (2017) 査読有

吉川はる奈、尾崎啓子、フィンランド・ネウボラにみる子どもと家族を支えるしくみの検討、埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, 15 129-134(2016)

吉川はる奈、尾崎啓子、細淵富夫、フィンランドにおける子どもの育ちを支える教育事情、埼玉大学紀要教育学部 64(2), 135-144(2015)

高峰彩華、吉川はる奈、大学生がもつ子どもや子育てのイメージ形成に与える影響、埼玉大学教育実践総合センター紀要 14,9-16(2015)

〔学会発表〕(計 7 件)

吉川はる奈・尾崎啓子他、子育て支援センターにおける支援者の関わりの特徴と役割、日本発達心理学会 27 回大会、2016、札幌

吉山怜花、吉川はる奈他、転居の多い家族が抱える子育て支援ニーズの特徴、日本家政学会 68 回大会、2016、名古屋

吉川はる奈他、乳幼児をもつ母親が子どもとの生活で喜びを感じるきっかけは何か、日本小児保健学会 2016、大宮

吉川はる奈他、子育てに喜びを感じる要因に関する研究、日本家政学会 67 回大会、2015

吉川はる奈、尾崎啓子、子育てにおける父親の母親に対する評価的サポートが母親や子どもに与える影響、日本小児保健学会 2015、長崎

Haruna YOSHIKAWA, What ' s MOKU- IKU? MOKU- IKU as ESD in Japan. OMEP 2016, Soul, Korea

Haruna YOSHIKAWA, Study on the joy of the elementary school children in Japan, how they feel in their daily lives. IFHE 2016, Daejeon, Korea

〔図書〕(計 1 件)

吉川はる奈(編集代表)、丸善出版、『児童学事典』(2016)「地域の子育て支援」「世界の子育て支援」担当

〔産業財産権〕なし

出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉川 はる奈 (YOSHIKAWA, Haruna)

埼玉大学・教育学部・教授

研究者番号：70272739

(2) 研究分担者

尾崎 啓子 (OZAKI, Keiko)

埼玉大学・教育学部・教授

研究者番号：80375592

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

ベルガー 有希子 (Berger, Yukiko)

吉山 怜花 (YOSHIYAMA, Reika)